大和の嫁入り駕籠

左の写真は、田原本町西代（にしんだい）の旧家に伝わる「嫁入り駕籠」です。駕籠本体の高さ 99ｃｍ、長さ 108ｃｍ、幅 70ｃｍで、担ぎ棒は残存 286ｃｍです。明治期に広陵町箸尾からの入嫁時に使われたとのことで、長く玄関の天井に吊られていたそうです。担ぎ棒は玄関のサイズにあわせて切断されたようで、本来 3.8m程度だったと思われます。

右の写真は駕籠の内部です。背もたれと肘置きは綿入りの布張りで、青地に巴文が施されています（写真右側）。床は板張りですが、使用時には同じデザインの座布団が敷かれていたかもしれません。

内部正面は障子窓となっており、（写真左側）、折り畳み式の机も設置されています。

左右の扉は左右スライド式ですが、容易に取り外しができます。内側には上下にスライドする雪見障子があります。

駕籠の外面はむしろ張りで、木枠は黒漆仕上げです。下部のコーナーは鉄板で補強されています。

扉の窓部分の外には竹ひご製の簾がつけられていました。簾の縁は黒色の布で仕上げています。

駕籠本体の下には２本の棒材が置かれ、担ぎ棒と下部の棒材を藤蔓で結束していました。担ぎ棒は天井の上部にある金具でも固定されてはいますが、荷重を支える意味では下部の棒材が重要な役割を果たしたようです。

明治時代になると、庶民は婚礼などで武士の風習を真似るようになり、嫁入りの時にそれぞれの家の威勢を示すため豪華な駕籠がつくられたようです。大正６年の『奈良縣實業人名録』によると、田原本町東町の野村丑松商店、田原本町の箱民といった指物業者が嫁入道具一式製造販売を謳っており、挿絵に嫁入り箪笥と嫁入り駕籠が描かれています。昭和期に自動車が普及するまでは、嫁入り行事の重要なアイテムとして駕籠が製作され、嫁ぎ先で家勢を示す象徴として玄関上に吊るす風習があったのでしょう。